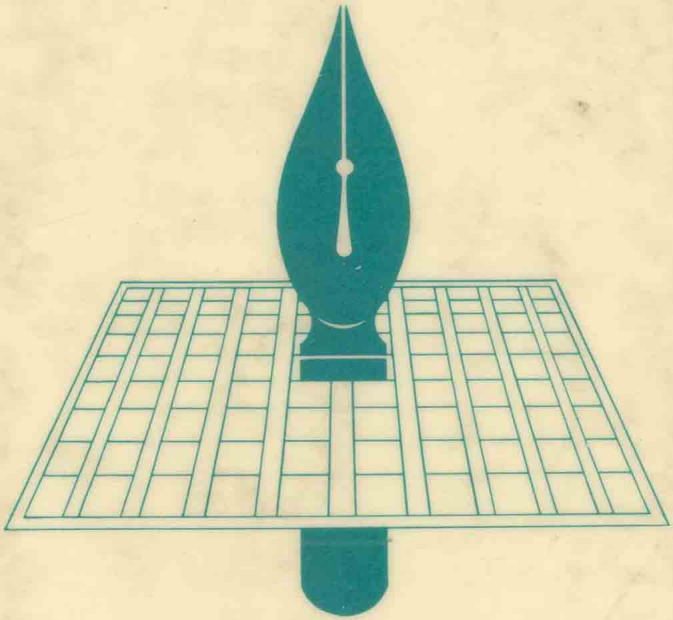
増補

学術論文の技法

斉藤 孝著



増補

学術論文の技法

斉藤 孝著

日本エディタースクール出版部

斉藤　孝(さいとうたかし)
1928年東京に生まれる．1953年東京大学文学部西洋史学科卒業．現在，学習院大学法学部教授．社会学博士．
主要著書に『第二次世界大戦前史研究』(東京大学出版会，1965年)，『スペイン戦争』(中央公論社，1966年)，『歴史と歴史学』(東京大学出版会，1975年)，『戦間期国際政治史』(岩波書店，1978年)，『昭和史学史ノート』(小学館，1984年)，『国際政治の基礎』(有斐閣，1988年)などがある．

増補 学術論文の技法

1977年 8 月 5 日　第1版第 1 刷発行
1986年12月20日　第1版第11刷発行　　定価 1300円
1988年 5 月20日　増補版第 1 刷発行

著　者　斉　藤　孝
発行者　吉　田　公　彦
発行所　日本エディタースクール出版部
東京都新宿区市ケ谷田町 1-6
電話　東京(03)260-5891〈代〉
出版分室直通(03)267-4952
FAX　(03)267-4954

©斉藤　孝 1988
ISBN4-88888-136-7
精興社印刷・松岳社製本

はしがき

この小さい書物は、主に人文科学・社会科学の分野で、学術論文(大学の卒業論文・修士論文・博士論文など)を書こうとする人びとのために書かれたものであります。今日、この分野で研究を進めている若い学徒の数は実に多いのですが、論文執筆のために実際的な手引きとなる書物は意外に少ないようです。また、大学教育でも論文作成の技術についての具体的な指導は不足していると思われます。

もとより、学術論文とは、その形式をも含めて、一人一人の研究者の創意工夫の産物であるべきですから、学術論文の型に唯一の絶対的な決まりがあるわけではありません。要するに、内容が大切なのです。しかし、日本の学界には慣行として成立している論文の約束があり、そのような約束を無視して論文を書くことは無謀といってもよく、また非能率的でもあります。科学においては学術用語というものが、その意味と適用の範囲において、一定の約束を持っております。そこで、その約束を理解し習得することによって、研究を一層進めることができるのです。同じように、学術論文の作成技法についても、最小限のルールに従うことによって、研究の努力が表現され、さらに

学問的交流のための手段を見出すことができるのです。学術研究の成果のかなりの部分が論文という形式でまとめられ、公表されるという慣行が近い将来に消滅するということはないであろうと思います。優れた研究が適切な表現形式を見出さないままに、埋もれてしまうことは実際には多いのです。独創的な発見にしても、論文としての体裁の上であまりに稚拙であるために、学問的な説得力を自ら減殺している例は少なくありません。

私自身がこれまでに優れた論文を書いてきたわけではありません。自分の専門について論文めいたものを書き始めたころは、全く暗中模索でありました。つまらないことを臆面もなく先生や先輩に質問したり、先学の論文のスタイルを模倣したりして、何とか体裁をつくろってきました。そのような私に、論文の書き方を指導する資格があろうとは思えませんが、いつの間にか自分が、後進の論文を指導したり審査したりする立場に置かれ、いろいろな論文に接することが多くなりました。そのような経験を重ねるうちに、論文のルールというものについて私なりの理解が出来上ってきたように思います。私の専門も限られているために、誤りのないようにと考えて、論文の書き方についての先学による幾つかの文献を参照して、この書物が生まれましたが、私の勉強不足のためにまだまだ至らない所が多いことでしょう。読者の皆さんから率直な御批判をいただいて、この小さい書物をこれから成長させて行きたいと願っております。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

この小さい書物にも、生まれるまでにそれなりの歴史がありました。十年ほど前、論文の註記の心得といったメモを東京大学大学院社会学研究科の学生に配布したことがありました。また、主に大学院学生諸君を対象として、一九七〇年ごろに何回か話したことが、整理されて「学術論文の技法」という題で『歴史評論』(一九七四年五月号)に掲載され、さらにそれが若干の訂正の上、『歴史科学への道』(校倉書房、一九七六年)上巻に収録されました。また、日本エディタースクールの吉田公彦氏が一九七三年七月のエディタースクール夏期講座に「論文の書き方」と題した四回にわたる講義を行なう機会を与えてくれました。その上、この講義の速記録を全面的に加筆訂正した連載講座「学術論文の技法」は、雑誌『エディター』に一九七六年九月から九回にわたって掲載していただきました。それぞれ私にとっては試行錯誤のようなものでしたが、このような一応の経験を生かしてようやくこの書物を書くことができました。ここに出版に当って、日本エディタースクールの吉田公彦氏、定村質士氏及び外池孝男氏に厚く御礼申し上げます。

この書物の第二章については神奈川大学図書館司書大久保久雄氏の御校閲を仰ぎました。また、巻末の「文献をさがすための文献一覧」は同氏の手に成るものであります。改めて同氏に御礼申し上げる次第であります。

最後に、個人的な回想ですが、私が始めて卒業論文に取りかかったころ、私の幼稚な質問に快く

御教示を賜った江口朴郎先生の御好意にこの機に感謝することを許していただきたいと存じます。

一九七七年六月

増補版を出すにあたって

一九七七年に初版を出したこの本は、幸い多くの読者に恵まれて、いつの間にか十年あまり経過しました。この十年の間に、この本のテーマにとって大きな変化は、ワープロの出現と急速な普及であると思います。大学などの論文にも、ワープロによることという指定がだんだん見られるようになりました。そこで、「ワープロによる論文作成」の章を設け、また、「文献をさがすための文献」を改訂して、この増補版を作りました。ほかの部分についても書き直したいところがありますが、著者の健康上の理由もあって、全面的な改訂は他の機会を待つことにして、今回は、最小限の補正にとどめました。

「文献をさがすための文献」については、初版と同様に大久保久雄氏を煩わしました。厚く御礼申し上げます。

一九八八年三月

斉藤　孝

目　次

はしがき……i

学術論文の技法

序章　学術論文とは何か……三
1　文章の目的……三
2　学術論文の目的と特質……七
第一章　論文への出発……一四
1　テーマの設定……一四
2　テーマの修正と決定……二二
3　論文の分量……二六
第二章　資料の蒐集と記録……三〇

1 資料の蒐集……三〇
2 文献の探索——図書館の利用……三六
3 文献目録の作成……四〇
4 ノートの記載……四六
第三章 論文の構成と体裁……五〇
1 論文の構成……五〇
2 序論の役割……五四
3 論文の体裁……六〇
4 論述の学術性……六六
第四章 論文の文章……七一
1 文体と表記……七一
2 表記・用語についての注意……七八
3 文章作成の練習……八七
第五章 論文の註……九四
1 註記の原則……九四

2　註の形式……一〇〇
3　欧文の註……一〇八
第六章　原稿の作成……一三〇
1　原稿の体裁……一三〇
2　欧文の原稿……一三八
第七章　小論文の要領……一四一
1　小論文の特質……一四一
2　小論文の技術……一四四
第八章　ワープロによる論文作成……一四九
1　日本語ワープロの出現……一四九
2　ワープロと論文の体裁……一五四
3　ワープロと日本語の学習……一五七
結　び……一六一
参考文献……一六四

附　録

文献をさがすための文献一覧……大久保久雄編……一六九
文献をさがすための文献一覧(増補)……大久保久雄編……一九八
専門資料所蔵館一覧……二四
全国主要古書店一覧……二二
索　引……二三八

カット・日下　弘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

学術論文の技法

序章　学術論文とは何か

1　文章の目的

私たちは日本語を話し、日本語によって生活を営んでおります。しかし、考えてみると、私たちが文章を書く機会は、それほど多いものではありません。何らかの目的を持った場合にだけ文章を書くのです。言い換えますと、私たちが文章を書く場合、何らかの目的を持っているのです。

そのもっとも明瞭な場合は、手紙でしょう。手紙の場合は、読ませる相手が決まっております。特定の相手に対するコミュニケーションという実にはっきりした目的があります。一方、相手がない文章もあります。例えば、日記であります。日記は、読ませる相手がいない、或いは、あるといえば自分である文章であります。後世になって自分の全集が出た場合を予想して、日記をどう書こうかと考える人も作家などにはおりますが、そのような人は一般的にいって、あまり多くないはずです。ドイツのナチスの宣伝相であったゲッベルスという人は自分のための日記を書いていました

が、それを公刊するに当って改訂しております。つまり読者という読ませる相手を意識したわけです。このような人は、いわば、例外でありまして、普通の人は日記を自分のために書いているわけです。よく日記を外国語で書く人がいますが、これは日記を家人に読まれないための用心といってよいでしょう。日記は自分のために書くものですから、自分でわかればよく、従って、文章である必要もありません。よく手帖などで用いられるように、自分だけにわかる符牒でも暗号でもよいわけです。

一方、試験の答案というものがあります。これは、どれだけ勉強したかを、授業内容をどれだけ身につけたかを、教師に見せるものであります。或いは、大学では、答案の形が変ったものとして、レポートというものがあります。レポートとは、いわば家で書いてくる答案でありまして、学校の試験場で書くよりは分量が大きく、いろいろな参考書を読んで書くことができます。レポートはその形式からいうと小論文といってよいのですが、答案であるという意味では、試験場の答案とレポートとは、それほど性質上の違いはありません。要するに、自分が勉強したことを、教師に見せる手紙と考えてよいでしょう。

このように、私たちが文章を書こうとする場合には、何らかの相手を予想して書いているのであります。そして、その文章は何らかの目的を持っております。手紙を書く場合には相手に対して、

これこれをいいたい、知らせたいという要求があって書くわけです。答案とかレポートは、自分の勉強したことについて教師に見てもらい、成績をつけてもらうという試験用の目的があるわけです。

或いは、例えば、政治運動のビラや立看板などは、相手が不特定な大衆であるか、或いは不特定ではないとすれば、学生という相手が決まっていて、何らかの政治的アピールないしアジテーション、宣伝をするというはっきりした目標をもって書かれております。ビラとか看板の文章は、人に強くアピールするものでないといけないのです。広告のための文章も同様であります。従って、長たらしい文章よりも、気のきいた標語やキャッチフレーズの方が有効になるのです。

このようにして、文章とは誰か読者を意識するものであり、或る目的を持っているといえます。また、目的があるような、ないような文章もあります。いわゆる筆の赴くままに書くエッセイないし随筆という類の文章です。これは、誰に読ませようと思って書いているのでもなければ、或いは誰が読んでもいいというような文章です。日記のように、自分のために書くエッセイもありますが、どちらかといえば座談のように気楽に読者に語りかけるものが多いようです。

いわゆる総合雑誌等に載っている論文は、学術論文というよりも評論と呼んだ方がよいでしょう。評論に学術的価値が無いという意味ではありません。また、学術論文と見るべき評論もありますが、どちらかといえば、例えば、今度の国会についてどう考えるか、日中関係とか、日本の漁業とかに

ついてどう考えるか、というような、何らかの具体的な問題についての意見や主張を述べる言論が評論であります。或る問題について反対なのか賛成なのか、或いは中間なのかといった、結論を明確にすることが評論の目的でありまして、結論に到達する研究手続を明らかにする学術論文とはこの点で違います。

普通、日本語で論文と呼ばれるものには、いろいろな種類があります。総合雑誌や新聞に出る評論も論文と呼ばれ、会社の調査室とか研究所などによる、何らかの問題についての現状報告・調査報告なども論文と呼ばれます。また、学術論文と呼ばれるものも、程度によって分けますと、大学の学部卒業の際の卒業論文、さらに大学院の修士論文があり、博士論文があります。また学問の分野によって論文の形に違いがあります。人文科学、社会科学の領域と自然科学では博士論文でもそのスタイルに相当の違いがあります。また、学校の制度に関係なく学術雑誌・論集に載せられる研究論文もあります。いずれにしても、学者・研究者ひろく学界を読者として意識して書くものであります。ともかく、自分の論文を、どのような目的で、誰に読んでもらうために書くのかということを十分に認識した上で出発しなければなりません。

論文を読む直接の対象として想定されるのは、その分野および関連分野の研究者である、といってよいでしょう。もとより、専門家でない人が読んではいけないということはありませんが、その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c